

登録に向け、第3回『ながやま子どもの水辺協議会』を開催！

「大人が変われば子どもも変わる」は、子どもの水辺にも通ずる意識

第3回「ながやま子どもの水辺協議会」が去る平成17年3月3日（木）、「川のふるさと交流館・さらら」の2階研修室において開催されました。今回は、主に「ながやま子どもの水辺」の活動における安全対策面について、来年度の活動内容についてなどを議題に意見交換が行われました。

前回に引き続き永山小学校PTAの梅野由紀子さんがオブザーバーとして参加されたほか、旭川市教育委員会生涯学習課の清水蓮雄課長が出席されました。

意見交換に先立ち、清水課長からご挨拶とともに、次のようなお話がありました。

「近年、子どもをめぐるさまざまな事件が起きているが、これらは全て大人の側に責任があります。いま国や道などが進めている『大人が変われば子どもも変わる』と銘打った活動は、大切な子どもをきちんと育てていくために、大人たちが心を正し善悪を判断し注意するよう変われば、子どもも変わっていくのではないかと思います。この活動の核となるのは、やはり家庭であり地域ですから、子どもの水辺の活動主旨にも通ずるのではないのでしょうか。また、旭川は川のまちと言われていますが、現在は残念ながら川をフィールドとした子どもたちの活動の場がありません。永山新川はヤマベなども

生息する、まさに理想的な川と言えます。子どもは遊びを通じて経験を積んでいくもの。ぜひ、ここに子どもの居場所をつくり、子どもたちにとって有意義な活動をサポートしていきましょう。」



旭川市教育委員会・生涯学習課の清水課長



主な意見交換

今回は、第2回の協議会で課題とされた「安全対策面について」の意見交換が行われ、つづいて来年度の活動について、その方向性が検討されました。

まず、安全面では、第1回・第2回での意見交換をふまえてつくられた素案を元に、次のような意見が交わされました。

安全対策面について

- 大切なのは、この川で何ができるかを具体的に子どもの目線で考え示してあげること。子どもたちが実験的に何かを行っていく中で少しずつ必要に応じて環境を整えていく方がよい。最初から設備を整えたところで始めるよりも自由度があって良いのではないかと。
- 我々も子どもと一緒に川に入らなければ、本

当に必要なものがわからないと思う。

- 永山新川は危険の少ない川だと思うので、あまり恐れずに水にふれあい、親しむことを先行させて良いのではないかと。
- 子どもはいろいろな経験をふまえて学んでいくもの。大人の目だけで枠組みを決めてしまわない方がよい。子どもたちにアンケートなどを取り、どういう川でどんなことをしたいか聞き、その遊びの中でどんな危険があるか問いつけることで子どもの危険への意識が変わると思う。
- 以前の「バリアフリー」のように、作っただけ誰も使えない…というのではなく、永山新川で遊ぶ子どもたちにとって必要な安全設備を必要に応じて整えるのがよい。
- 大人の感覚だけで安全対策を決めず、子どもに川を体験させ、子ども自身の能力で考えさせてみるのも良いのでは？

- 自由度は必要だが、一方では危険な所を教えておいて欲しいとか、困って欲しいという要望もある。
- 危険を知らせる看板がいろいろありすぎて何を伝えているのか不明な看板も多い。
- 安全設備を作るだけでなく、もっと地域の人々などがどうすればその事故がなくなるか考え、取り組む意識が必要なのではないかと。
- マンガやひらがなの多い看板なら子どもたちにも理解でき、伝わりやすい。
- 現時点では川についての情報発信が少ない。今後は、「さらら」の1階などに永山新川の流れの状況を知らせるシステムを取り入れたい。
- 親としては、安全面の設備などがきちんと整っていないと心配なので、最低限の安全対策を確保して欲しいと思う。

（裏面につづく）



第3回「ながやま子どもの水辺協議会」の様子。



子どもをよく知る谷地元さんは「子どもと一緒に川に入らなければ何がかわからない」と語る。



左から、佐藤佳明さん、太田寛さん、山崎芳子さん、藤原誠さん。